1992年（平成4年）10月

92.10.27

発行責任者
小林孝栄
（昭29電）

都島だより
KANTO NANIWA KOGYOKAI
NEWS
7
関東浪速工業会
会報

投稿送り先
竹村繁幸（昭36電）
流山市東深井84-102
〒270-01 TEL. 0471-55-2293

『特別寄稿』最近の教育雑感

（元電気科教諭）土屋　昌夫

突然、面識のない者が拙文をさしあげ、戸惑って居られることと存じますので、初めに簡単に自己紹介をさせて頂きます。教師として初めて教職につきましたのが、都島工業高校で昭和23年でした。以来、14年間勤務させて頂きました。その間、電気科の教諭として昭和29年、昭和32年、昭和36年に担任として卒業生を送り出しました。なお、その間にソフトボール部・バレーボール部・原子力研究会の顧問として、所属クラブの皆様と運動・勉学を共にさせて頂きました。その後は昭和37年に此花工業高校に転勤し、昭和58年に定年退職しております。現在は私立高校の数学の非常勤講師として暮して居ります。

在職中は、今から考えると相当難しい問題などを出していたのに、それらによく対応して頑張っていたと思います。特に数学的な面から考えますと、現在の多数の高校生と比べて格段の差があったと考えられます。そのように優秀な力を持っている諸君を充分に教育することができずに世に送り出したことについては、事あるごとに自省の思いにかられています。

最近の中学校より高等学校への進学傾向は、皆様が既に御承知のように、大学進学を目指して普通高校を希望しています。したがって、その余波を蒙って工業高校、商業高校などの実業高校を希望する生徒の数および質は低下の道を辿って居ります。この傾向の歯止めとなる方策を工業高校の各校は、種々考え実行に移されています。身近な所では、都島工高の理数工学科ではないでしょうか。真のねらいは聞いていませんので、次のことはあくまで私見としてお聞き下さい。この理数工学科に進学すれば、大学それも理数科方面に進学することができ、また、電気科などの他の学科からの転科も可能になることでしょう。

何よりも学校全体として大学進学が身近になるので、生徒の勉学意欲が増大することと思います。

その他では、府立工業高校で電気科を廃止して情報処理科に変えるという試みも行われています。近いうちに、更に進んだ様々な対策が考えられ、実施されると思います。

最後に、私達教師側が現在一番困っていることは、生徒が昔のように真面目に一生懸命私達の話を聞こうとしないことです。このことは、どこの学校でも聞かされる問題です。

しかし、世の中が不況になればなるほど、この問題は解消されていくと信じて居ります。

何故かといいますと、世間が不況になれば就職が非常に困難になるので、生徒は安閑としておれなくなり自然に勉学に力を入れざるを得なくなるからです。したがって、不況になれば、正常な状態の授業が行えるものと期待して居ります。

最後に、皆様方と何等かの形で都島工高を通じて関係を持ち、このようにして交際を持つことができたことを無上の喜びと存じて居ります。私も今後共、皆様方のために何等かの力添えをしてする決意ですので、皆様方もいつまでも元気で各自の分野で活躍されんことを心からお祈り申し上げ、拙文を終らせて頂きます。

工業化学の復権を

（昭和34年工化）柴田　孝次

傅統あるわが母校、都島工業高校の工業化学科が消えて行く……、昨年このニュースを耳にし、目を疑ったのは私だけではあるまい。

なぜ工業化学科を廃止するのか、私には理由がわからない。私達の身近には化学製品が溢れていて、無限の恩恵を受けている。

現在の時流に流されて――たとえば、大気汚染問題、水俣病などをとらえて――世の中が化学嫌い（アレルギー）となっており、それにともなって学生の受験者数が減少していることなどを理由に、短絡的に化学を廃止するのは、あまりにも見識の無いことであり、当局および学校関係者の良識を疑いたい。

このようなことを本気で実施してゆくことは、益々若い青少年達に化学は諸悪の根源という誤まったイメージを植えつけることになり、悪循環になるのではないか？

将来において必ず大きい禍根を残すことになると考えられる。

化学はこれからの世の中に益々必要な学問であり、技術であると信ずる。

エネルギー問題、環境問題（地球に優しい化学製品の開発）バイオテクノロジーの問題等々、一寸考えてみてもこういう大きいテーマ、すべては化学が関与している。

一日も早く、関係者各位のその場限りの考えを反省して、さらに充実した、現代にマッチした工業化学科の復活を望むものである。

ロシアと合弁の国際電気通信事業会社に参画して思うこと

（昭和36年電気）石垣　英明

私は今、来年1月にロシア極東地域と日本を結ぶ国際電気通信のサービスを提供するロシアとの合弁会社を立ち上げるべくウラジオストックと東京の間を行き来し、10月には現地の会社へ出向する予定である。会社が予定どおり営業開始できれば、世界一不便と言われているロシア極東との国際通信は大幅に改善されテレビジョンの生中継も可能となる。昨年末ついにソ連邦が解体され、旧ソ連全体の政治経済情勢は大きく変化し市場経済への移行が進行しつつある。私の勤務先のKDDもその潮流にのってロシアへの進出を決断し、今年の6月にウラジオストックに合弁会社を設立した。ロシア側は土地や建物を現物出資、日本側が資本金を出すという形で、社長は現地人とし総勢29名のロシア人社員を使ってローコスト・ハイリターンの会社を稼働させるべく努力している次第です。

ウラジオストックはロシア共和国沿海州の州都、人口約70万人の港湾都市である。ウラジオストックの市名は、「東方（ボストーク）を征服せよ（ウラジ）」のロシア語に由来している自然の良港を持つウラジオストックは、緑豊かで坂の多い起伏に富んだ街である。我々の会社もこの東方の地に設立された通信会社ということでVOSTOK-TELECOM（ボストークテレコム）と呼ぶことにした。ウラジオストックは軍事戦略上の重要拠点として戦後長い間秘密のベールに包まれていたが、92年1月、完全に開放された。北緯は函館よりやや北、東経はほぼ広島と同じである。冬季は名物のシベリア下ろしで身を切るほどに冷たく感じるとのことである。

ロシアでの仕事は決して順調というわけに行かなく、経済改革の中で、パートナーの地方通信局の民営化が進み自分達の利害のみに基づいて行動し始めており、信頼関係が確立できない。法制度も突然変更され行政が頼りにならなくなっており、ロシア人の行動や考え方についていけないものもあり難航しているのが実情である。国際通信だけでなく国内通信のインフラの整備も同時に進行させなくては、本当の意味での疎通改善にはならない。電話の普及率は一〇〇世帯当たり20台で、積滞が多く電話機の設置を申し込んでも2年待ってもまだ実現されないという現状である。ロシア極東地域の通信サービスの質を向上させるための我々の使命は重く、一日も早く工事を完成させ営業開始したいとロシア側のパートナーを叱咤激励しながら仕事を進めている毎日です。

ロシア人は仲間意識が強く、口先ばかりで実行が伴わないため、我々日本側としては、いつ相手に裏切られるかも知れないという一抹の不安がいつも心をよぎり疑心暗鬼の状態に陥ります。確かに、ヒト、モノ、カネのないロシアの社会で合弁会社を立ち上げていくのは大変なことである。しかし、ここまで来れば、今更、後戻りもできないので、後はパートナーを信頼し、ハートツーハートで確固たる信頼関係を築きながら事業を進めることが、このプロジェクトを

成功させるには不可欠ではないかと自分にいい聞かせながら仕事に邁進しております。

在学時代　音楽部活動の思いで

（昭14年土木）　富岡　文雄

昨年勤務先である建設コンサルタント会社への求人依頼の件で久方ぶりに母校を訪れましたところ、教員室の上方の階にあるらしい音楽部練習室の方向から、ブラスバンドの色々な管楽器による個人練習音が聞こえて来て、遙か50数年前の在学時代を思い出しとても懐かしい気がしました。

あの頃課外活動としての音楽部は、管弦楽部と尺八部の二つから成りたっており、私はその管弦楽部に所属して色々と演奏活動に参加出来たことは、本当に幸せであったと思います。

今でこそ全国至るところの高校にブラスバンドがあって、コンクールに参加したり、時には自校の運動部に対する応援に出動するなどの活動をしておられるようですが、当時はブラスバンドのある学校はそれ程多くは無く、ましてやオーケストラのある学校となると全国的にも非常に珍しい存在でした。そこで、当時の活動の一端をご紹介したいと思います。

先ず、団員数は年により多少増減はあったものの平均すれば25人位であったように思われ、また楽器編成のあらましは次のようなものでした。

弦楽器群：ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス

管楽器群：フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、トランペット、コールネット、トロンボーン

打楽器群：大太鼓、小太鼓、トライアングル

その他若干（印は複数）

記憶に残る演奏活動の主なものとしては、年1～2回の校内発表演奏会の他、大阪中央放送局（NHK大阪支局の前身）音楽番組への放送出演、甲子園夏の野球大会における入場式並びに閉会式での演奏行進を初めとする試合合間の演奏出演、同じく甲子園球場での全国体操大会における伴奏出演、5月27日海軍記念日当日「軍艦マーチ」の繰り返し演奏による大阪市内の演奏行進、高槻市内における軍歌「露営の歌」発表会での伴奏出演など、その出番の機会もかなりのものでした。

勿論甲子園での出演は私達だけでなく、「関西中等学校吹奏楽連盟」の一員として朝日新聞社からの要請により、純白のユニホームを貸与されて最有力の天王寺商業その他数校のブラスバンドと合同で、2～3年間続けて出たように思います。

一方校内の発表演奏会では、管弦楽部と尺八部がそれぞれのレパートリー曲を披露したほかに、どこかの琴演奏グループも加わった両部合同演奏で「千鳥の曲」「都の春」などのいわゆる和洋合奏曲も演奏して、好評を博したように記憶しています。

そして私達オーケストラの音楽上の技術に関しては、大阪放送管弦楽団のクラリネット奏者の方（中山先生）が、時折来校されてご指導を受けていましたが、そのお陰で外人指揮者によるプロ交響楽団の練習風景を私達団員一同放送局のスタディオで特別に見学させて頂いたこともあります。

ところで私自身はこのオーケストラの中で、最初の2年間が打楽器、次いで第2クラリネットを受け持った後、6年生になる前、先輩の指揮者から思いもかけずバトンを引き継ぐこととなり、1年間を無我夢中で棒振りに専念しました。今にして思えば、その技術及び音楽知識は甚だ未熟なもので、団員の皆様には大変ご迷惑をかけたのでは無いかと申し訳なく思いながらも、オーケストラ・メンバー諸氏のご協力と温かいご支援のお陰で何とか卒業前の演奏会を無事に了えることが出来、後輩の指揮者にバトンを引き継いだものでした。

思えば、この頃の日本は太平洋戦争の前触れともいうべき日支事変の真最中で、いわゆる「非常時」に入っていたとはいえ、まだそれ程緊迫した雰囲気では無く、勉学のかたわらこのような課外活動に打ち込むことによって、ある意味で青春時代の充実感を味あわせて頂いた母校に心から感謝していますが、その一方でクラスメートや音楽部仲間であった先輩・同輩達の少なからぬ方々を、その後の戦争で失い残念の極みです。

当時の思い出としてまだまだ書きたいことは沢山有るのですが、紙数の関係もあってこの辺で筆を措くこととして、母校音楽部今後のご活躍を心からお祈りする次第です。

中間層受難時代

（昭和34機械）松田　吉弘

日銀の公定歩合の引下げ、政府の不良債権に公的資金の投入の構想発言等により、不況感を拭い去ろうとする努力にもかかわらず、希望的なムードとは裏腹に、不景気がさらに深刻さを増す昨今である。

この風を正面に受けている各企業は素早い、ドラスティツな対応を迫られ、最近は対策が先行し、調査とか調整が後追いしている様が垣間見られる。そしてそこからは、消費税導入時点にあった庶民の実感が彷彿される。十分な調査もなく物事の本質にメスを入れないまま、バブルを膨らませたのと同じ処理でまた経営者が対応を採るとすれば、またさらに大きな誤りを犯すことになり、会社に自分と家族を託している従業員にとっては、これは大きな災いである。

この不況の中で公立の小、中、高等学校の第一土曜日の休日が実施され、新聞ではこの土曜日を家庭サービスに徹するサラリーマンの姿が報じられていたが、果たして、これが全体像なのかどうか、私は疑わしく思っている。

また、労働時間の短縮が謳われ、日本では、一八〇〇時間を目指し（何んとドイツでは、一五〇〇時間を目指しているそうである。）時短が進められている。

しかしながら、今まで日本が世界的に経済的に優位に成り得たのは、サービス残業を含む実労働時間の過大さがベースとなっている。時短が実施されるのは良いが、トップ↑→中間管理職↑→一般職、大手↑→一次下請↑→二、三次下請の各層の歪が出て来るのは明らかである。最近、強力な親会社のコストダウンの圧力に、二、三次協力工場の中では、これではとても成立たないと言って断るところが出始めているそうである。

また、会社内では若手層優遇の背景もあり、遅く来て、早く帰る、休暇はしっかり取る形態が一般化してきている様である。

どうもこれからは、中間層受難の時代であるというのは被害者意識だけではない様に思われる。

今、中間層や一次下請、あるいはそれぞれの層の中でも不満やシラケが渦まき、弾け出される人や、家庭中心の考え方への切替え、割切りから脱落が出始めている。

そういう私自身の心の中でも、日々両サイドの声による葛藤が繰り返されている。

しかし、現在のところ、永年培われた糞真面目さが、さらに自分を崖縁に追い込んでいる。さて、どこまで耐えられるか…。

おことわり

紙面の都合上、西谷様（昭9土木）、西村様（昭36機械）、西田様（昭48建築）の御寄稿は記載できませんでした。次号のMニュースに掲載させていただきますので御了承お願いします。

（編集委員）

催し物報告

幹事　竹村　繁幸

お忙しい中を多数御参加していただき、旧交を温め、楽しい一日を過していただけたことと思います。

尚、事故もなくスムースに完了でき、幹事より厚く御礼申し上げます。

（その1）

NHK放送センターの見学

5月16日（土）

参加者　25名＋御同伴5名

NHKの内藤テクニカルディレクター様（他2名）のご説明を受けながら、スタジオ、副調整室に案内していただきました。ブラウン管の裏の技術について活発な質疑応答も行なわれました。

（その2）

隅田川～お台場へ納涼屋形船

8月22日（土）

参加者　26名＋御同伴3名

浅草の柳橋よりお台場を周廻し、船より眺める都心のネオンも格別で、天ぷらに舌つつみしながらカラオケで2時間半、大いに盛り上がりました。